



Title	ALCOHOLISMにおける自己制御に関する一考察
Author(s)	島袋, 恒男
Citation	琉球大学教育学部紀要 第二部(27): 83-92
Issue Date	1984-1
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1946">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1946</a>
Rights	

# ALCOHOLISMにおける自己制御に関する一考察

島 袋 恒 男\*

## A STUDY ON SELF-CONTROL MODEL OF ALCOHOLISM

Tsuneo SHIMABUKURO

(Received August 20, 1983)

### Summary

Recently psychological investigation about to alcoholism has concentrated on behavioral self-control model which is based on social learning theory. But behavioral self-control model is emphasising clinical therapeutic perspective which do not illustrate mechanism of alcohol dependency. From psychological view point, it is necessary to illustrate mechanism of alcohol dependency. Cognitive control processes which is antecedent to self-control processes is related to occurring stress and anxiety, and occurred stress and anxiety lead to drinking behavior. It is reconsidered that stress and anxiety reducing alcohol drinking interfere with cognitive control processes and self-control processes which is associated to personal and social goal attainment.

### I はじめに

「酒は百薬の長」と称される一方で「きちがい水」とも称される。このような酒にまつわる評価は、酒そのものよりも飲酒のもたらす個人的・社会的結果に基づいている。確かに飲酒は社会的関係を円滑にし促進する。そして労働による心身の被労やストレスを軽減してくれる。しかし、その効果的な利用を誤ると、個人的にも社会的にも重大な影響を生み出すことになる。

我が国における飲酒人口は、年々増加の一途をたどり、それに連れて問題飲酒者も増加する傾向にあるという(額田, 1983)。清水(1979)は我が国における飲酒状況の社会学的背景について考察し、その特徴をAlcoholic Social Systemと名づけている。Alcoholic Social Systemとは、社会そのものがアルコールの存在を抜きにしては十分に機能しえない状態を指して

おり、その中には飲酒を促進する「許容性」と、飲酒を規制する「規範」がうまく働いているという。しかし、飲酒規範の性格は飲酒者にとってそれ程顕著なものではなく、いわゆる「暗黙裏の規制」であることが多い。このような理由から、「適正飲酒」の問題は社会学的・文化的視点の問題だけでなく、飲酒行動を実行する個々人の心理学的問題となってくる。

このような観点から見ると、適正飲酒という個人的・社会的飲酒基準を無視し、そして飲酒行動の制御の失敗の結果がいわゆるアルコール依存症ということになる(Donovan, 1980)。行動レベルでの飲酒行動の失敗は、心理的・身体的レベルでの、アルコール依存(嗜癖)の形成過程として理解できる。アルコール依存者は、社会的飲酒者に比較して、飲酒行動の生起する状況の要請を無視した飲酒形態を示すといわれるが、この事は適正飲酒の基準を無視し、嗜癖というアルコールへの依存機構だけに基づく、飲酒行動をとらねばならなくなっていくことを示している。

教育心理学

\* 教育学部非常勤講師

齊藤(1978, 1983)によると、アルコール依存症を特徴づける共通した気質・人格の類型は困難であるという。この見解は逆説的に見ると、アルコール依存の進行が、気質・人格だけでなく、生物・医学的側面における要因から、心理・社会的要因の複合的相互作用の結果として生じることが示している。それにもかかわらず、我々はアルコール依存に深く関係する心理的機制の存在について仮定することができる。心理的機制とは行為の主体である「自我」の機能として大まかに理解され、具体的には、思考・認知領域における特定のパターンとして理解される。

齊藤(1978)は、アルコール依存症を学習に伴うアルコール依存の成立の結果として理解し、その特徴を次のように要約している。

- ①アルコール依存は、初回飲酒体験の報酬効果から始まる“連続的な”条件づけ過程であり、その結果もたらされたアルコール摂取に関する「動機づけの障害＝(精神的依存)」である。
- ②動機づけ障害の主要な一側面として「調節機能の障害」がある。調節機能障害とは、身体感覚や外的状況に応じて飲酒量を抑制するnegative feedbackの障害を示す。
- ③調節機能障害の結果として“様々な程度”の抑制障害の飲酒が生じる。
- ④長期に渡る大量飲酒は、いかなる個体に対しても、耐性の上昇と離脱症状の発現、即ち、身体的依存を生じる。これは生体のホメオスタシス機構に多様な影響を与え動機づけ障害を増強するが、それ自体がアルコール依存の本質を示すわけではない。
- ⑤アルコール依存の発展過程は、極めて状況依存的であり、多様であるが末期には一定の臨床像に収斂していく。この過程は多くの場合非可逆的である。

本稿の主な目的は、①の動機づけ機能の障害と、②の調節機能の障害の問題を、社会的学習理論を基礎とした行動制御の観点から検討することにある。特に知的特性を背景とする認知機能の重要性は、飲酒行動の制御のみならず、一般的行動の制御とも深くかかわってくる。一般的行動の制御の失敗の結果が様々な形でのスト

レス・不安を生み出し、アルコール依存を動機づけていく過程において、認知機能は重要な位置を占めている。

Donovan. 他(1980)はアルコール依存症に対する心理学的アプローチにおける有効な基準を次のように指摘している。

- ①アルコール依存症状の記述
- ②飲酒行動の生起する状況の把握
- ③有能な治療計画の示唆
- ④治療予後の予測

彼はこの4つの基準を満たすには、社会的学習理論に基づく「認知—行動制御」によるアプローチが必要であると指摘している。具体的には、Rotter(1966)の行動結果の随伴性の認知(Locus of Control)、行動結果や強化者の知覚された価値、行動の生起する状況の認知などの要因や、Bandura(1977)の自己有効性感情(Sense of Self-Efficacy)の要因がアルコール依存症の理解と治療において重要であると考えている。

Donovan. の主張する「認知—行動制御」の立場からのアルコール依存症の理解は、有効な治療計画を主目的としており、アルコール依存に関する心理的機制については十分な考慮が払われていないように見える。ストレスや不安などの情動的要因がアルコール依存を動機づける主要因であることを考えるとき、ストレスや不安の形成、そしてその克服に関係する一般的行動の自己制御過程の問題と並び、個人の社会的目標の達成を支える社会的コンピテンスの立場からも、アルコール依存症をとらえていくことが必要になってくる。

以下、自己制御理論について簡単に概括し、認知機能の役割を重視する社会的コンピテンスの立場から、自己制御の意義を考察し、アルコール依存者における自己制御の特質について考察していく。

## II 自己制御を支える認知的制御

アルコール依存症に関する自己制御理論の背景には、「様々な飲酒問題を呈するアルコール依存者には、飲酒行動をはじめとする一般的行動

の制御の仕方に問題がある」と見なす一般的仮説がある。この仮説の妥当性の検討を目的として多くの研究が実施されてきているが、その成果は必ずしも一致した結果を示さず、アルコール依存症の多様性、複雑性を反映したものとなっている(worell 1981, 樋口他 1979)。

Rotter の Locus of Control Scale (内的制御—外的制御尺度)における行動結果の随伴性の認知や、Banduraの自己有効性感情が行動制御の実行を支える心理的要因であるが、Thoresen & Mahony (1974)は自己制御の特徴を次のように述べている。すなわち、制御者が先づ「行動経過を観察し、データの記録と分析を行ない、一定の物事(例えば、思考パターンや物理的環境)を変化させる為のある技術を用い、望ましい変化が生じているか否かを評価する」一連のプロセスとしてとらえている。つまり、行動制御は

- ①環境調整：ここでは行動の生起に影響する適切な環境手がかりが整えられる。
- ②行動調整：ここでは人は目標行動の生起に続く結果に自分自身を当面させる。

の2つの技法として理解されている。環境調整とは、望ましい行動を生起させ、望ましくない行動を抑制する物理的・心理的状況を人が自ら選択していく過程を指しており、Skinner (1974)はその過程を刺激制御と呼んでいる。一方行動調整は、自己の行動を当初の目標に応じてどのように評価するかに関係してくる。具体的には、自己強化の手続きを指しており、Bandura & Whalen (1974)は、自己強化的行動がモデリングによって獲得されることを示している。行動調整には、自己強化を支える自己観察の技術もまた重要な要因となってくる。アルコール依存者における自己観察と自己強化の問題はHeilbrun, et al (1979)やTarbox (1979)によって検討され始めておりIIIで詳しく紹介することにする。

先に自己制御の立場からのアルコール依存症へのアプローチの主目的は、治療的観点にあり、アルコール依存を支える心理的機制についての関心が弱いということを指摘しておいた。アルコール依存を促進する重要な心理的要因とし

て飲酒動機の問題があるが、アルコール依存者における飲酒動機は、対人的ストレスや不安に関係している(Oleary & Donovan1978)。このような意味でもアルコール依存と社会的コンピテンスの問題を結びつけて考察していく必要がある。

Ford (1982)は社会的コンピテンスを「ある社会的文脈の中で、有効な手段を行使して個人の社会的目的を達成し、望ましい結果をもたらす能力」として定義している。そして社会的コンピテンスの下位属性として次の4つの側面を分類し、各々における有効な予測子について指摘している(Fig 1)。

- ①方向づけプロセス(Directive Processes)  
：自己をとり巻く内外の環境から情報を獲得し、望ましい行動目標を設定する。そして制御プロセスを活性化する(予測子—目標志向性、社会的目標への関心など)。
- ②制御プロセス(Control Processes)：獲得した情報の貯蔵、分類、行為プラン・プログラムの作成(予測子—社会的能力、目標修正思考、目標—手段関係の把握など)。
- ③交流プロセス(Transactional Processes)  
：環境との相互作用を通して行為プラン・プログラムを実行していく。
- ④調整プロセス(Regulatory Processes)：交流の結果として新しい情報を獲得し、当初の目標と行動結果の比較へフィードバックする。行動結果が望ましくないならば行為プラン・プログラムの修正を指示していく(予測子—共感性、行動結果の熟慮など)。

社会的コンピテンスの下位属性はネガティブ・フィード・バック・ループを構成しており、行動結果と目標の不一致は、新たな行為プランの実行を動機づけていくことになる。そして、行動結果の成功・失敗に対応して、Rotterの行動結果に関する期待、Banduraの有効性感情が形成されていくことになる。

社会的コンピテンスの概念は、ソレセンとマホニー(1974)と同様に、認知的制御、行動的制御の2側面を強調するものであった。

認知的制御の問題を認知—情動との関係で検討したものにCarver(1979)のサイバネテ

ック・モデルがある。このモデルは、認知的制御の理論的根拠を Duval & Wicklund (1972) の Self-Attention の機能においており、後述す

る Hull (1980, 1983) の飲酒の動機理論と深く関係している。

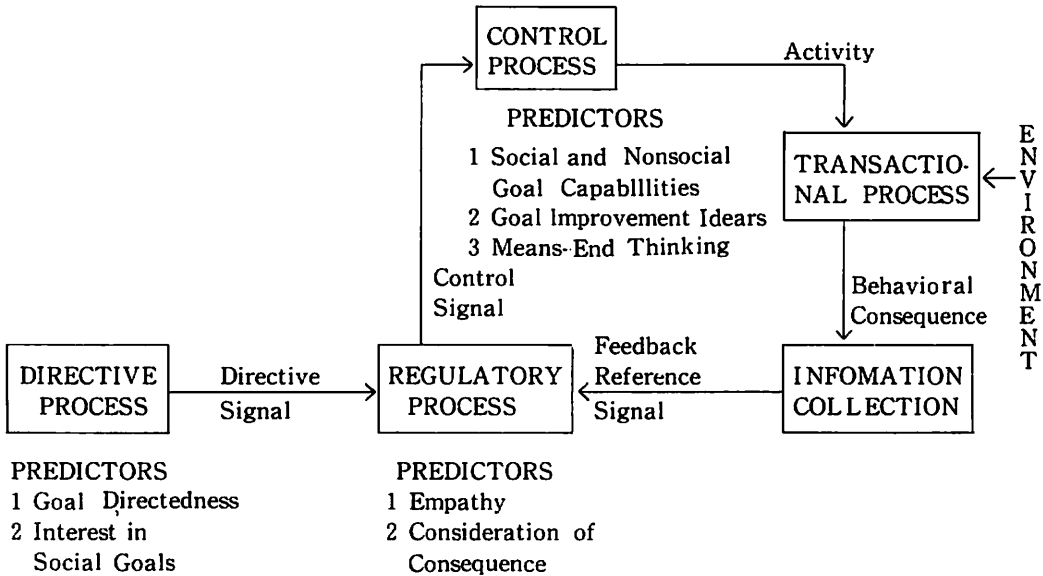


Fig. 1 Subsystem of Social Competence (by Ford, M.E. 1982)

Carver (1979) は Self-focus Attention の機能と Miller, S (1960) の TOTE (Test-Operate-Test-Exit) ユニットにおけるフィード・バック理論を結びつけ、認知的制御について次のように考察している (Fig 2)。

- ① 行動基準が不明な事態での注意自己焦点化は、自己像の特性を顕著にする。
- ② 行動基準が明確な事態での注意自己焦点化は、基準に合致する行動の実行を促進する。
- ③ 基準に合致する行動の実行が妨害されると、行動結果に関する査定がなされる。
- ④ 望ましい行動結果の期待は、ポジティブな感情を生起させるが、望ましくない行動結果の期待はネガティブな感情を生起させ、行動の実行の中止をもたらす。

このように認知的制御が効果的に実行されているときは問題は起らない。しかし、行動基準に合致しない行動が起ったとき、すなわち望ましくない行動結果が随伴するときに問題が生じ

てくる。注意自己焦点化はこのような事態において望ましくない行動結果の原因の自己帰属を促進することが確認されている (Duval & Wicklund, 1973)。Storms (1978) は①望ましくない行動結果の原因の自己帰属は、ストレスや不安などの情動体験を生起させ、②さらにこのストレスや不安が望ましくない行動の頻度と強度を高めていくことを示している。このようなストレスや不安が飲酒を動機づけていくことを Higgins & Marlatt (1975) の結果は示していた。しかし、ストレスや不安などのネガティブな感情状態が必ずしも飲酒を導びかねばならないという必然性は見当たらない。そこには、飲酒効果に関する個人期待や、飲酒の生起する状況の特性などの要因が働いている。Senter (1979) によるとアルコール依存者は、初回飲酒の報酬効果を体験しており、飲酒への強化期待をもっていったという。

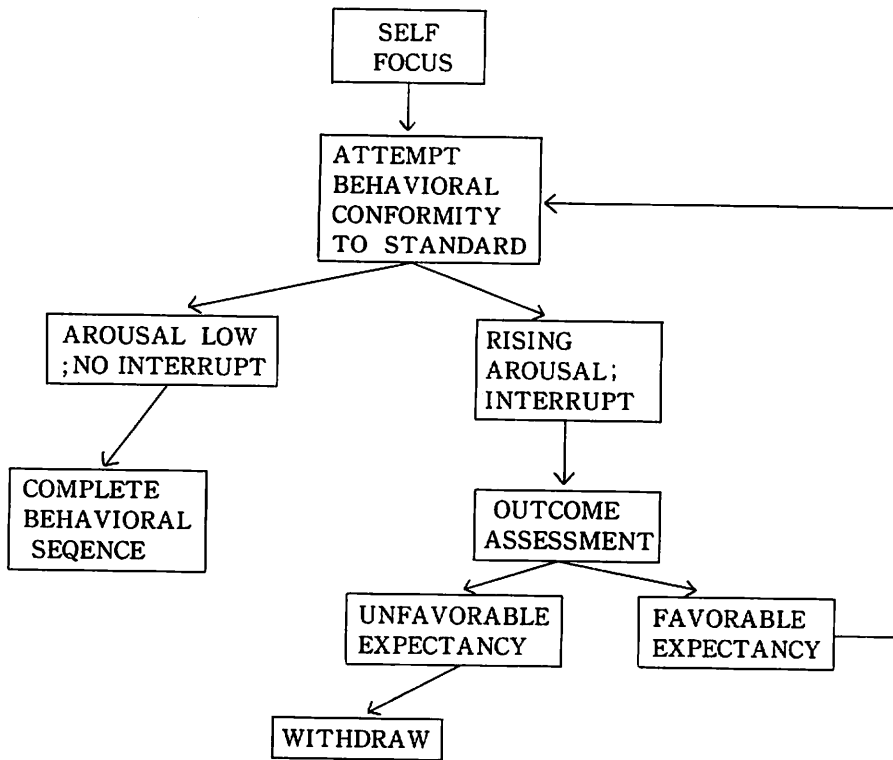


Fig. 2 Cognitive Control Process  
(by Carver, C.S. 1979)

### III アルコール依存者における行動制御をめぐって

コンピテンスには、環境との相互作用を実行する技能としての客観的側面と、新しい冒険又は試みを断行する際に要求される自信のような主観的側面がある（東江1979）。アルコール依存症においても自己制御の客観的側面と主観的側面の相互関係は理論的にも臨床的にも重要な問題である。

自己制御の客観的側面は、「知的特性」を背景とする「認知-行動制御」の特質を指しており、具体的には様々な知的課題や認知的バッテリーにおける実行水準のレベルを指している。

Heilbrun (1979) は、自己観察、自己強化課題に他の認知的バッテリーを加えて、アルコール依存者を実施し、その結果を因子分析によ

て説明している。その結果、第1因子として認知的諸手掛りの中から適切な手掛りを選択する能力を示す「認知的制御」の因子、次いで、目標の維持、概念の査定、想起、仮説の構成などを示す「内的走査」の因子、そして、自己の行動の遂行の予測を示す「自己強化」の因子が抽出された。認知的制御と内的走査の因子は、先に示した社会的コンピテンスの「方向づけプロセス」における自己の内外の情報の収集・選択及び行動目標の設定能力に深く関係するものであり、広義の意味での自己観察能力を示していると思われる。健常者における結果の比較から、認知的制御と内的走査に負荷を示す課題でアルコール依存者の得点が低く、アルコール依存者における認知的障害の存在を示していた。しかし自己強化課題における得点は健常者よりもアルコール依存者が高いという結果を示してい

た。これに続く追跡研究において、認知的制御・内的走査の得点が低く、かつ自己強化の得点の高いアルコール依存者の治療予後が好ましくないという結果から、彼らはアルコール依存者の自己強化は、行動の遂行水準を促進しない特異な自己強化であると解釈している。アルコール依存者の心理的機制の特徴として現実の無視、歪曲があるとしばしば指摘されるが、このような特異な自己強化は、アルコール依存者における低い自尊心の補償傾向と結びついていることが予測される(Heilbrun & Schwarz, 1980)。

Tarbox (1978) は、ハイルブランらと同様の手続きを用いて、アルコール依存者の認知的課題における実行水準と、実行水準の予測・期待の矛盾について検討している。健常者との両測度の比較の結果は、すべての認知的課題の実行水準は明らかにアルコール依存者が劣ることを示し、アルコール依存者における認知的障害の存在を示していた。しかし、実行水準の予測・期待は逆にアルコール依存者が健常者よりも高く、アルコール依存者における現実を無視した自己評価を行なう傾向があることを示していた。

アルコール依存者における自己制御の客観的側面の障害は、さらにアルコール依存者の知的特性に関する研究によって裏づけることができる。O'leary (1979) は、WBISとHRテストを用いてアルコール依存者と健常者の知的特性の比較を実施した。その結果、WBIS言語性テストでは両者に差異は見い出せないが、WBISパフォーマンス・テスト、HRテストでは、両者に著しい差異のあることを見出した。すなわち、立体構図検査、数列象徴検査、絵画完成検査、算術検査、カテゴリー検査において健常者よりもアルコール依存者の得点が劣っていた。この結果はアルコール依存者における「抽象的問題解決能力」、「視覚-空間協応能力」、「知覚-運動技能」の障害を示すものと解釈された。

このように、アルコール依存者には、行動の自己制御を実行する際に必要とされる認知能力の障害が顕著であり、認知的障害が自尊心の低下をもたらし、同時に特異な自己評価システムを形成していることが予測される。

Bandura (1977) は、特異な自己評価システ

ムが、しばしばアルコールによる自己麻酔に導びくことがあると強調しているが、この特異な自己評価システムは、自己制御の主観的側面である行動の制御感の歪みを予測させている。すなわち、先に述べたアルコール依存者における自己制御の仮説から、アルコール依存者は、Rotter (1966) のLocus of Control Scale (内的制御型-外的制御型尺度)において、外的制御型を示すことが予測される。

Donovan & O'leary (1975) は、Locus of Control Scale と、様々な社会的場面で内的・外的ストレスを個人が克服してきた程度を測定するTiffany Experienced Control Scale (以下、EC 尺度)をアルコール依存者と健常者に実施し、その比較を試みた。その結果、Locus of Control Scaleはアルコール依存者と健常者を弁別しえず、両者の制御感の方向に差のないことを見出した。しかし、EC 尺度の得点はアルコール依存者が劣り、アルコール依存者は、個人的・対人的ストレスを克服してきていないことを見出した。このような結果はアルコール依存者におけるストレスや不安の低減としての飲酒機会が多いことを示していることができる。

これに続き、O'leary & Donovan (1978) はLocus of Controlの次元が、主に飲酒の動機に関係し、EC の次元が飲酒の結果に関係していることを見出している。彼らはLocus of Control Scale と EC 尺度の2次元でアルコール依存者を分類し、Alcohol Use Inventory を用いて様々な飲酒動機の種類、問題飲酒の形態を調べた。その結果、行動の外的制御型を示すアルコール依存者に「社会的促進」、「劣等感の克服」、「リラックスの手段」としての飲酒が特徴的であり、アルコール依存者における外的制御型にストレスや不安傾向が関係していることを示している。一方 EC レベルの低いアルコール依存者に、「知覚的障害」、「銘酩」、「飲酒による荒廃」、「一般的アルコール依存症状」などの精神的・身体的障害が特徴的であった。この結果は、おそらく EC レベルの低い者はストレスや不安傾向が強く、過剰飲酒に走る傾向があることをうかがわせている。また、EC レベルが

高く内的制御型を示すアルコール依存者は、他と比較して問題飲酒傾向が少ないと報告している。

アルコール依存者における自己制御の仮説に反して、アルコール依存者は外的制御型を示さない(Goss & Morosco, 1970 Gozali & Solomon, 1971)。しかし、Krapman (1979)は一般的行動の制御感(RotterのLocus of Control Scale)では、アルコール依存者は外的制御型を示さないが、「権威像による制御感」、「偶然による制御感」というように制御領域を限定するとアルコール依存者は外的制御型を示すことを報告している。彼によれば、アルコール依存者における外的制御型は、権威主義傾向、失望感と結びついているという。この外的制御型と権威主義、失望感の関係は、アルコール依存者における対人的技能の弱さを反映していると考えられる。

Donovan & O'leary (1978)は、アルコール依存症における行動の制御感を、飲酒事態、飲酒状況にだけ限定することで、アルコール依存者の外的制御型を確認している。25項目に渡る飲酒行動制御スケールを作成し、実施した結果アルコール依存者はかなり高い外的制御型を示す結果が得られた。さらに、因子分析によって飲酒行動の制御感の構造が明らかにされた。その結果、飲酒への誘惑に対する個人的抵抗を示す「内的制御」の因子と、対人的状況での飲酒に対する抵抗、ストレスに対する飲酒を示す「対人的制御」の因子が確認された。また、アルコール依存者における飲酒行動の制御感は、Beck Depression Inventoryの結果と高い相関を示し、アルコール依存者の行動制御の失敗が、うつ状態を導びくことがありうることを示唆していた。

以上に検討してきた如く、アルコール依存者の特徴として、自己制御の客観的側面においても、また主観的側面においても健常者に比較して障害があることを示していた。このようなアルコール依存者の特徴は、過剰飲酒を動機づける間接的要因とも見なすことができ、また長期に渡るアルコール依存の結果であると見なすことができる。両側面における自己制御の障害は相乗的に作用し、自己有効性感情の低下などに示

されるネガティブな自己評価を形成していくことが考えられる。

#### IV 飲酒動機と自己制御

アルコール依存者の自己制御能力の障害はストレスや不安の生起を予測させ、飲酒を動機づけていくことをうかがわせているが、飲酒動機に焦点を当てた研究は比較的少ない。ここでは、数少ない飲酒動機に関する研究の成果から、ストレスや不安に対する飲酒が、自己制御に及ぼす影響について考察してみたい。

小杉(1980)は、アルコール依存者における飲酒理由を、質問紙の結果を因子分析し、「ストレスからの逃避」、「生理的效果」、「社会的圧力」に分類している。そして、ストレスからの逃避を主な飲酒理由とするアルコール依存者は、YG性格検査の結果において特に「情緒不安定」、「非社会的傾向」を示すと報告している。

ストレスや不安に対する飲酒が、アルコール依存を形成しやすいということは従来から指摘されてきており、過剰飲酒は自己の能力に対する不信の結果であると説明する「自己障害説」(Tucker, 1980)や、低い自尊心への補償として飲酒が生起すると説明するHeilbrun(1980)らの説明は、ストレスや不安に基づく飲酒がアルコール依存者に顕著であることを示している。

このようなストレスや不安に対する飲酒動機の問題について、Hull(1980, 1983)は、認知的立場から実験的に検討し始めている。Hullは認知的制御理論を提唱したCarver(1979)と同じく、注意自己焦点化をもたらす、認知的、情動的、行動的結果に注目した。しかし、Carverの視点とは異なり、注意自己焦点化が、しばしば自己批判(Self-Criticism)を生起させ、否定的自己評価をもたらすことを強調した。彼は注意自己焦点化の機能を理論的背景として飲酒行動の生起に関して次のような仮説を立てた。

- ①アルコールは、注意自己焦点化の主機能である情報の解説過程に干渉し、その機能を妨害する。
- ②自己に関する情報の獲得過程に干渉することにより、アルコールは注意自己焦点化の



生起とは相反する結果をもたらし、自己の内的・外的基準に合致する行動の生起を妨害する。

- ③注意自己焦点化が否定的自己評価と結びつく限りにおいて、アルコールは否定的自己評価を低減させる役目を負っている。
- ④否定的自己評価の低減そのものが、飲酒を促進し、維持するのに十分条件となっている。

Hull (1983) は、上記の仮定に基づき飲酒が自己に関する陳述(Self-focus statement)を減少させ、自己に関する特性語の想起を妨害することを示した。さらに別の実験において、彼らは飲酒量が注意自己焦点化と過去経験の成功・失敗の結果として増加することを実験的に確認している。すなわち、注意自己焦点化の程度を示すSelf-Consciousness Scaleを用いて被験者を分類し、実験課題における成功・不成功を被験者にフィード・バックした。その後別の実験と称してワインの品種当てテストを実施し、飲酒量を求めた。その結果、注意自己焦点化が強く、実験課題の達成の不成功をフィード・バックされた被験者の飲酒量が多いという結果を得た。

Higgins & Marlatt (1975) は、健常者を対象として、恐怖場面におけるストレスや不安が飲酒量を増加させることを示していた。しかし、Hullの飲酒動機に関する実験結果は、飲酒が単にストレス・不安の低減をもたらすだけでなく、Ford (1982) や Carver (1979) の提案する自己制御行動の遂行を支える認知的制御過程に干渉し妨害することを示している。

上に述べた通常飲酒における動機理論からだちに、アルコールへの心理的依存を説明していくことは困難である。しかし、Hullの飲酒の動機理論がストレス・不安飲酒の生起を予測し、このようなストレス・不安飲酒が長期に渡って続く限りにおいて、除々にアルコール依存が形成されることを説明している。

## V おわりに

本稿の目的は、アルコールへの心理的依存に関する心理的要因を検討することであった。ス

トレス・不安低減飲酒がアルコール依存者に特徴的であるという自己制御の研究結果から、ストレス・不安を形成する心理的機制として認知的制御の問題が主に考察された。その結果、認知的制御の失敗は自己制御の失敗を意味し、ストレスや不安を生起させることが認知的制御の理論や関係する研究結果から示唆された。そしてストレス・不安低減飲酒は、単にストレスや不安の低減のみならず、認知的制御過程に干渉し、新たにストレスや不安を増幅し、飲酒行動を動機づけていくことが示唆された。

## 引用文献

- 東江平之 1979 心理的コンピテンスの発達, 山本多喜司監修, 保育入門シリーズ 第14巻 乳幼児の生活指導第2章 北大路書房
- Bandura, A. 1971 Social Learning Theory Prentice-Hall Inc 野原他訳 人間行動の形成と自己制御 金子書房
- Bandura, A., & Whalen, C.K. 1974 Transmission of Patterns of Self-Reinforcement Through Modeling. in Goldfried, M. R. & Merbaum, M(Eds) Behavior Change Through Self-Control Holt Rinehart and Winston Inc
- Bandura, A. 1977 Self-Efficacy; Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. Psychological Review vol. 84 191-215
- Carver, C. S. 1979 A Cybernetic Model of Self Attention Processes. J. Personality Social Psychol vol. 37 No.8 1251-1281
- Donovan, D. O'leary, M. R. 1975 Comparison of Perceived and Experienced Control Among Alcoholics and Non-Alcoholics. J, Abnorm. Psychol vol. 84 726-728
- Donovan, D. et al 1980 Assesment of Expectancies and Behaviors Associated with Alcohol Consumption. J. of Studies on Alcohol vol.41 No11 1153 -1185.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 A Theory of Objective Self-Awareness. New York Academic Press
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1973 Effects of Objec-

島袋：ALCOHOLISMにおける自己制御に関する一考察

- tive Self-Awareness on Attribution of Causality, *J of Experimental Social Psychology*. vol.19 17~31
- Ford, M.E 1982 Social Cognition and Social Competence in Adolescence. *Developmental Psychology*. vol.18. No.3 323-339
- Goss, A., & Morosko, T. E. 1970 Relation Between a dimension of Internal-External Control and the MMPI with an Alcoholic Population. *J. consulting and Clinical psychology*. vol. 34. 189-192.
- Gozali, J., & Soloman, J. 1971 Control Orientation as a Personality Dimension among Alcoholics. *J. Consulting and Clinical Psychology*. 34 189-192
- Heilbrun, A. B. Jr., & Schwarz, H. G. 1980 Self-Esteem and Self Reinforcement in Men Alcoholics. *J. Studies on Alcohol* vol.41 No11 1134-1152
- Heilbrun, A. B. Jr et al 1979 Cognitive Structure and Behavioral Regulation in Alcoholics. *J. Studies on Alcohol* vol.40 No.5 387-400
- 樋口一辰他 1979 Locus of Controlに関する文献的研究 *東工大人文論叢* vol.5 95-135
- Higgins, R.L. & Marlatt, G. A. 1975 Fear of Interpersonal Evaluation as a determinant of Alcohol Consumption in Male Social Drinker. *J. Abnormal Psychology* 84.644-651
- Hull, J.G. et, al 1983 The Self-Awareness-Reducing Effects of Alcohol Consumption. *J. Personality and Social Psychology* 44.461-473
- Hull, J.G et al 1983 Self-Consciousness Self-Esteem and Successes and Failure as Determinants of Alcohol Consumption in Male Social Drinkers. *J. Personality and Social Psychology* vol.44 No.6 1097-1109
- Hull, J.G. 1984 A Self-Awareness Model of the Causes and Effects of Alcohol Consumption. *J. Abnormal Psychol*, vol.190 No.6 586-600
- 小杉好弘他 1979 飲酒理由とアルコール乱用(そのI) *精神医学*21(9) 963-970
- Krupman, G. 1980 Generalized Expectancies of Alcoholism, Multi-Dimensional Locus of Control, Hopelessness and Machiavellianism. *J. Studies on Alcohol* vol 36 1022-1030
- Mischel, W. Ebbesen, E. B. & Zeiss, A. R. 1972 Cognitive and Attentional Mechanism in Delay of Gratification. *J. Personality and Social Psychology* 21.204-218
- 額田繁 1975 日本の飲酒 西川漢八他編 日本の飲酒を考える 第1部p2-17 医学書院
- O'leary, M. R & Donovan, D. 1978 Drinking Patterns of Alcoholics Differing in Level of Perceived and Experienced Control. *J. of Studies on Alcohol*, vol. 39 1499-1505
- Senter, R. et al 1979 A Comparative Look at Rating of the Subjective Effects of Beverage Alcohol. *Psychol. Rec.* 29 49-56
- 斉藤学 1978 アルコール症の疾病概念をめぐって(そのI) - 現行の疾病概念とその批判 - *精神医学*20(1) 4-30
- 斉藤学 1978 アルコール症の疾病概念をめぐって(そのII) - アルコール依存の機構とアルコール症 - *精神医学*20(2)120-147
- 斉藤学他編 1983 アルコール依存症 有斐閣
- Rotter, J. B. 1966 Generalized Expectancy for Internal versus External Control of Reinforcement. *Psychol. monograph* vol. 80 1-28.
- 清水新二 1979 わが国における飲酒と断酒 遠藤四郎編 *臨床精神医学* 2 p1-30 星和書店
- Skinner, B. F. 1974 Self-Control. in Goldfried, M. R. & Merbaum, M. (Eds) *Behavior Change Through Self-Control*. Holt Rinehart and Winston Inc
- Storms, M. D. & Caul, K. D. 1978 Attribution Processes and Emotional Exacerbation of Dysfunctional Behavior. in Harvey, J. H. (Eds) *New Direction in Attributional Research*
- Tarbox, R. 1979 Self-Regulation and Sense of Competence in Men Alcoholics. *J. studies on Alcohol*. vol.40 No.9
- Thoresen, C. E. & Mahony, M. J. 1974 Behavioral Self-Control. Holt Rinehart and Winston Inc. (上里一郎監訳) *セルフコントロール*, 福村出版
- Tucker, F. A et al. 1981 Alcohol Consumption as a Self-Handicapping Strategy. *J. Abnorm. Psychol.*

vol. 9 No3

Worell, L. & Tumility, T.N 1981 The Measurement of Louus of Control Among Alcoholics. in Lefcourt, H.M. Research with the Locus of Con-

trol Construct. vol. 1 Assesment Method Academic Press